



セヴラック通信

Courrier de Séverac

第11号

2011 後期

日本セヴラック協会・会報

Société Déodat de Séverac - JAPON

17

第 17 回例会
2011 年 10 月 23 日(日)
術芸館

プログラム

例会

18:00-19:00

【演奏とお話】

末吉保雄

セヴラック：歌劇《風車の心》について その 5

森 朱美 (S) ・ 鎌田直純 (Bar) ・ 末吉保雄 (Pf)

セヴラック：歌劇《風車の心》第 1 幕第 4 場より

Déodat de Séverac : Extrait de "Le coeur du Moulin" Acte 1, Scène 4, Poème de M. Magare

森 朱美 (S) ・ 末吉保雄 (Pf)

セヴラック：歌曲《私の可愛いお人形さん》

Déodat de Séverac : Ma Poupée Chérie

～休憩～

【演奏】

館野 泉 (Pf) ・ 平原あゆみ (Pf)

エスカンデ：《音の描写》三手連弾

1. 爬虫類 (エッシャー)
2. 夢 (ルソー)
3. 砂に埋もれた犬 (ゴヤ)
4. 空の青 (カンディンスキー)

館野 泉 (Pf)

当日発表

懇親会

20:00 ~

南仏セルダーニュ地方の教会建築と歴史（1） ●松本智勇	4
〈連載〉セヴラック随想（2） ●濱田滋郎	9
〈連載〉セヴラックと私 ●本宮廉子	12
第16回例会の報告 ●鎌田和夫	14
第17回例会プログラム	表2

南仏セルダーニュ地方の教会建築と歴史（1）

第16回例会のお話より

松本智勇

第16回例会の松本智勇さんのお話を、2回に分けて紹介します。紙幅の関係で、使用された多数の美しい写真のごく一部しか掲載できないことを、ご了承ください。

ここに収録した写真や内容は松本さんのブログ

<http://stundenbirne.jugem.jp/>

で詳しくご覧になれます。

フォンフロワド修道院、1910年

《休暇の日々から》

フランスのナルボンヌ近郊に、フォンフロワドという修道院があります（写真1）。ここを買い取ったギュスターヴ・ファイエという人が、101年前の1910年、友人を招待してヴァカンスを過ごしました。

写真2はその時の写真で、オディロン・ルドンが写っています。それからリカルド・ピニエス——いろいろな作品を初演したピアニスト——が、カメラで撮影しています。そのためここに写っていません。セヴラックも呼ばれて、一緒に楽しんでいました。

この年は、8月21日に《エリオガバル》をベジエの野外劇場で初演しています（写真3）。セヴラックはなにかを担いでいますね。

同じ日がどうかわかりませんが、写真4にもセヴラックが写っています。ギュスターヴ・ファイエもいます。ファイエは初期の印象派や、ゴッホ、ゴーギャンのコレクターで、自分でも絵を描いていました。廃墟だったフォンフロワドの修道院を買い取って整備したのも彼です。今はこの修道院で音楽祭が行われていて、サヴァールとかが毎年出演しています。



写真1 フォンフロワド修道院



写真2 客間で。ルドンは右端の横向き。

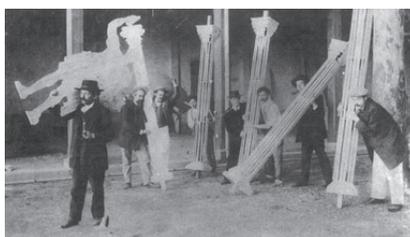


写真3 《エリオガバル》初演準備、左端がセヴラック

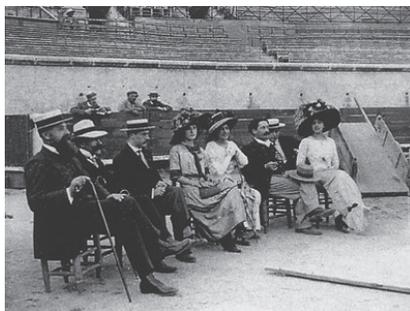


写真4 ベジエの野外劇場で。左端にギュスターヴ・ファイエ、右から3人目にセヴラック



写真5 ルドン『夜』

ルドンはこの修道院の図書室の壁画制作を依頼され、『昼』『夜』『沈黙』を描いていますが、『夜』（写真5）の絵の中にセヴラックの横顔や、精霊になったピニエスの頭が描かれています。そしてルドン本人と奥さんを描いた壁画も残っています。

『夜』はルドンの代表作ですが、公開されていません。1910年の翌年、セヴラックは《休暇の日々から》という曲集を出版しますが、その最初に〈シューマンへの祈り〉という作品があります。『夜』には、シューマンの肖像が描かれているので、何か関係していることが、推測されます。

教会の成り立ち ラングドック地方を中心に 《ラングドック地方にて》

教会の成り立ちについてお話ししましょう。いろいろな地方によって特徴が違うので、特にラングドック地方を中心にお話します。

写真6はサン・フェリックスの丘です。広いラングドックの平原にぽつんとあって、その上にサン・フェリックスの村があります。



写真6 サン・フェリックスの丘

キリスト教の教会は、バジリカというローマ時代の公共建築を転用したのが、そもそもの始まりでした。4世紀頃のものドイツのトリーヤにありますが、11世紀終わりになると、トゥールーズに、サン・セルナン教会（6ページ）という非常に大きな教会が建て始められます。サン・セルナン教会は、スペインの西の端サンチャゴ・デ・コンポステーラへの巡礼路の途上にある一番重要な街の聖堂でした。そのため、他の教会と少し違った構造になっています。

建物を上から見ると十字架の形をとっているのが西ヨーロッパの教会の大きな特徴です（例外もたくさんあります）。

一番大事なところは内陣から**アプシス（祭室）**にかけての部分です。教会の一番の目的は、ミサによって神様を讃えることなので、**祭壇**が一番重要な場所になります。

サン・セルナン教会の構造

主祭壇：ミサを行うための最も神聖な場所。多くは東端にある。

クリプタ：地下聖堂、聖遺物を保管する部屋。サン・セルナン教会は128の聖遺物を持っていた。

小祭室：主祭壇がミサを行っていて使えないときに使用。

多数の小祭室を持つのは巡礼教会の特徴。

聖歌隊席：この部分に聖歌隊が配置される。

天井：このタイプはトンネル・ヴォールトと呼ばれる。

天井を石造りの堅固なものにすることはヨーロッパの長年の悲願だった。カニグーのサン・マルタン修道院で初めて実現された画期的なもの。

袖廊：ミサの後に聖餅を授けたり等を行う。長く張り出した袖廊はロマネスク時代の特徴。ゴシック以降目立たなくなる。

主身廊：祭礼時、聖職者が主祭壇に向い行進した。

側廊：行進のとき信者がならぶ。

二重にすることで、巡礼のために動線を確保した。

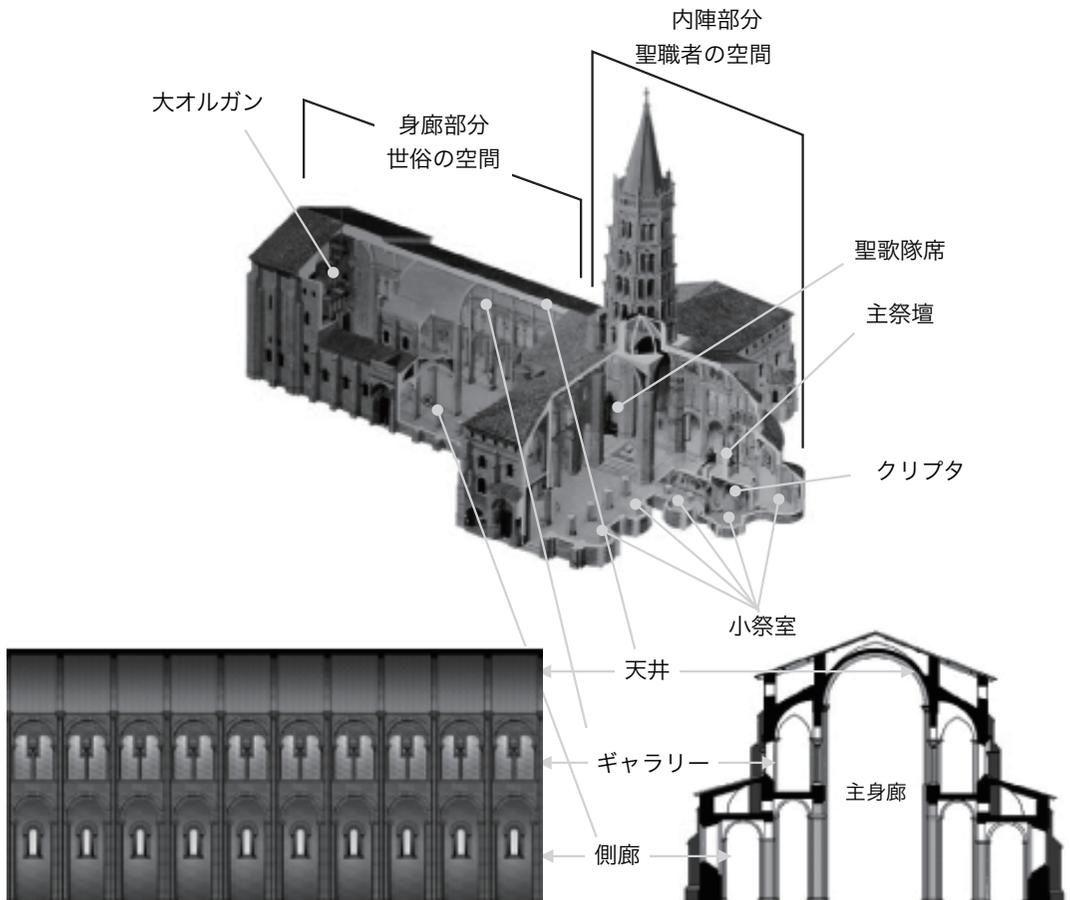
ギャラリー：女性信徒用にしたり、巡礼のための通路とした。

オルガン：カヴァイエ=コル製作のサンフォニック・オルガン。

ファサード 身廊 袖廊 アプシス



上から見ると十字架の形をとっている



一番大きなアプシスの周りに小さなミサを上げる**小アプシス (小祭室)** と呼ばれる構造物があります。

この巡礼教会の特徴は、ひっきりなしに多くの巡礼がやってくることです。真ん中ひとつの祭壇ではとても足りないので、小祭室をたくさん作りました。この張り出した小祭室が放射状に見えることから、**放射状祭室**と呼ばれるようになります。

巡礼路でこのような構造を建築家が試み始めて、これがヨーロッパ中に広まっていきます。パリのノートルダム大聖堂もこのような構造ですし、ドイツや他の地域にもありますが、始まりはこのあたりの教会でした。

主身廊という長い廊下があります。ここは通路にもなり、祭礼などのときに、列を組んで行進するのに、ちょうどよい空間です。主身廊の左右両側に**側廊**という空間をつけることが、かなり多いです。聖職者たちが真ん中の主身廊を行進し、側廊に信者が並ぶ、という構造です。

普通は主身廊1つと側廊2つの計3つの廊下のある構造になりますが、サン・セルナン教会の場合は、規模が大きくて、5つの廊下の構造になっています。改築する前のサン・ピエトロ大聖堂も同じ5つの廊下のある構造でしたが、これは格式のある大きな教会でないと作れません。一番外側の側廊は、祭礼の間でも巡礼が堂内を一巡りしたり、祭室にいて祈禱をしてもらう、そのための通路という意味合いもあります。これは巡礼路の教会の特徴で、規模の小さい教会は側廊が一對になっているものが多いです。

廊下の2階部分にあたる**ギャラリー**という場所は、ゴシック時代には消えてしまう構造で、南フランスとドイツに多く見られます。用途は少なく、巡礼のための通路として用いられったり、時代によっては、女性信者がおしゃべりでうるさいから、と上に押し込められたこともあったそうです。

天井は構造上では屋根に相当します。天井を石造りにしたのは、ヨーロッパではこのラングドック地域が初めてです。サン・セルナン教会は当時としては最先端の技術で作られていました。

サン・セルナン教会には、現在はカヴァイエ・コルの「サンフォニック・オルガン」と呼ばれる非常によいオルガンが設置されていますが、12世紀にはこんな大きなオルガンはありませんでした。オルガンはファサードの側か、あるいは塔の下あたりに設置することが多く、教会によっては2台や3台の複数のオルガンを設置するところもあります。

教会の建物にある軸には、それぞれ意味があり、水平軸は、過去から未来にいたる時間的な軸を意味します。例えば、洗礼を受ける前から秘跡を受けるまでが、その時間軸にしたがって、廊下の上にある壁画などに表され、他の例としては、(システィナの礼拝堂のように)手前に「創世記」を奥に「楽園追放」を配置して、旧約から新約までの世界を並べたりします。

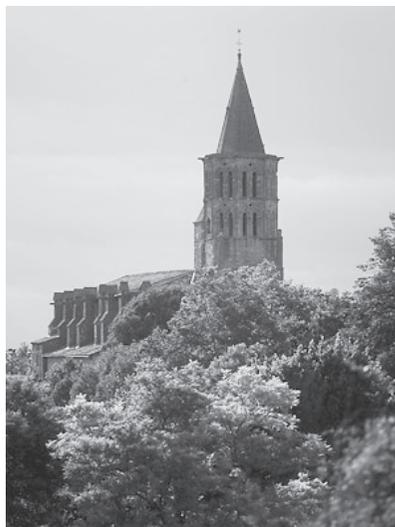
縦の垂直軸というものもあり、地上的なものから天上的なものまで、高さをそのまま教



サン・フェリックス村の中心部

A：オーベルジュ（三つ星）、B：教会

C：セヴラックの生家、D：広場



サン・フェリックス教会

会の構造に表していきます。これはセヴラックの音楽にも通じる要素です。ゴシックになると、この「地上」という要素が消えてしまって、ただひたすら「天上」を求めてどんどん背の高い教会になっていきますが、ロマネスク時代までは地上と天上という2つの意味合いが含まれているものが多いです。

同じラングドックのサン・フェリックス教会は、セヴラックの生まれた街の教会です。ここは、街の規模に対して非常に立派な教会です。

この教会は、主身廊だけで側廊がない構造になっています。同じトゥールーズにドミニコ会のジャコバン教会がありますが、こちらも同じく側廊がありません。ドミニコ会は、どちらかというと言教を重視した修道会なので、説教が建物のすみずみまで聞こえるように設計をしています。そのためサン・セルナン教会のような複雑な構造はとらずに、ひとつの大きな部屋をつくるという構造をとっています。

サン・フェリックスは、カタリ派という異端の栄えた場所でもあり、1167年には、この地でカタリ派の大きな集会が開かれています。12世紀にカタリ派に対する十字軍が組織されて、先ほどのフォンフロワドの修道院がその施設になって、南フランスのカタリ派が一掃されます。その後、この土地への見せしめとカトリックの正しさを示す意思表示として、村には不釣り合いなくらい大きな教会が建てられたということです。

(つづく)

(構成：亀田正俊)

〈連載〉 **セヴラック随想** (2)

濱田滋郎

ラジオから流れる〈ラバ曳きたちの帰り路〉に始まった私のセヴラック体験は、その後10年、20年と経つあいだにも、大きな伸展を見せたとは言い難かった。レコード集めを生き甲斐の一部とするようになって、セヴラックの作品を聴ける盤は本当に数少なくしか見当たらなかったのである。

SP盤から出発した私のコレクションだが、LPの時代が来ても、事情はあまり変らなかった。そんな中で目立ったのは、パリ音楽院教授を長く(1941-77)務めた名ピアニスト、ジャン・ドワイヤン(1907-82)が、仏エラート社から出し、有難いことに日本でも——たしか1960年代に——発売された組物のLPアルバム「フランス近代ピアノ音楽の精華」のうちに、セヴラック作品を何曲か収めていたことだった。ドビュッシー、ラヴェルのみならずダンディ、ルーセル、マニャール、ロバルツなどの作品を含む良いアンソロジー・アルバムで、演奏も、めずらしい曲目を紹介するのに充分、という以上のものがあつたと憶えている(ちなみに、この盤は後に日本でCD化もされたが、現在は廃盤)。また、おそらく格別に懐かしむ方々も多かろうと思われるブラジル〜フランスの名ピアニスト、掛替えのないニュアンスの持主だった、マグダ・タリアフェロ女史(1864-1986)が、こちらは1枚ものながら、たいそうデラックスな作りの「フランス・ピアノ名曲選」(エラート盤。ただし日本発売盤LPは、ごく簡素な廉価盤だった)の中で、〈ラバ曳きたちの帰り路〉を、いかにもじっくりくる肌触りと共に弾き上げていた。これは1曲のみだったが…。

* * *

しかし、それらは、然るべき感銘をもたらしてくれたとは言え、レコードを通じての体験であった。そうしたところへ、突然、セヴラックのピアノ曲を実演で味わえるという、なんとも嬉しい機会が私に訪れたのである。1970年代の後半だった。なにせ、30年以上前のことで、記憶に誤りがあったらいけない、なんとかその折のプログラムでも見つけ出して…と一応は探したのだが、残念ながら家の中のどこかに埋没してしまってわからない。あらかじめお詫びをしておいた上で、記憶の糸をたぐりながら記してみよう。

セヴラックを奏でて聴かせてくれたのは、フランスのピアニスト、ジャン＝ジョエル・バルビエ。何年何月であったかは忘れてしまって申し訳ないのだが、処は東京池袋の西武美術館、ここはしばしば音楽サロンとして使われていた。バルビエはそこでリサイタルを行い、そのプログラムが、半分サティ、半分セヴラックという、ざらにはないものだったのである。ちなみにバルビエは、アルド・チッコリーニと並んで、70年代にサティの楽曲のほとんどをまとめたLPアルバムを発表し、当時起ったいわゆる「サティ・ブーム」にもひと役買った人だから、世には彼をまず「サティ弾き」だとわきまえている音楽ファンが多かったのかもしれない。いっほうセヴラックに関しても、バルビエはその頃までに



ジャン・ドワイヤン (pf)
WPCC-5727～8 (エラート)



マグダ・タリアフェロ (pf)
WQCC-175 (タワーレコード)

「オール・セヴラック」のLPを2枚出していた。1枚はBAM盤、1枚は元々がエラートで、それが廃盤となったのち、小レーベルのフィデリオという会社から出直した盤だった。サティのほうは日本でもLPばかりか後にCDも出たが、セヴラックはフランス盤しかなかった。

ところで、いかにも「通」向きなそのリサイタルのことを私に教えてくださったのは、あしはらえいりょう 蘆原英了先生である。お電話であったか、あるいはお便りか。ともかくそれまでに、先生は、私がセヴラックを好きだと知っていてくださったのである。「こんど、わたしの友達で、ジャン＝ジョエル・バルビエといういっふう変わったピアニストが来て、セヴラックを弾きます。あまりない機会と思うので、よかったら聴きにいらっしやい」とのお誘いだった。有難く、嬉しく聴きに行ったのだが、果たしてバルビエは、セヴラックの何を弾いたのだったか、先に詫びたとおり、プログラムが見つからないので正確には言えない。記憶の内では、まず《セルダーニャ》だったという気がしてならない。ただ、私はそれ以前から、くだんのフランス盤LPでバルビエの《セルダーニャ》を聴いていたはずなので、その強い印象により、リサイタルで聴いたのも《セルダーニャ》だったと思い込んでいないとは限らない。いずれ、プログラムが掘り出せる時まで、この点はお預けとさせて頂ければ幸甚である（読者の皆様の中に、バルビエの来日と演奏会に関するくさぐさを、より判然とご記憶の方があれば、お伺いしたいと思う）。

ともあれ、演奏がたいへん素晴らしく心に触れるものであったこと、バルビエ氏が人品いやしからぬ、そして演奏ふりと比例して粹な雰囲気をおびた人であったことは憶えている。もう少しだけこの人について補足しておく、彼は1920年3月25日、フランスのベルフォールで生まれた（近年の消息は知らずにいたのだが、亀田正俊さんが調べてくださったところでは、1994年6月1日に他界されたとのこと。遅まきながら心より哀悼の意を表したい）。大学でギリシャ、ラテン語を会得するかたわらブランシュ・セルヴァおよびラザール・レヴィに就いてピアノを学んだ。1940～50年代には幾編かの小説を発表するかたわら1冊の「フランス音楽家辞典」を編むなど、文芸家・研究家としても一家をなした。そう言えば、フランスの代表的レコード雑誌「ディスク」にも彼はレコード月評者の一人として名を連ね、見識を披露したものだ。そのかたわら、ピアニストとしては1960～70年代以降、数々のレコーディングを行い、すでに言ったとおり、ニュアンス豊かな芸風で、少なくとも一部のファンから強く——と思われる——支持された。幸い私の手元には、前記のサティ、セヴラックのみならず、ドビュッシー、シャブリエ、アルベニスに捧げられた3枚のLPもあるので、彼ジャン＝ジョエル・バルビエがフランスのピアニストの中でも一種独特な品格と“香り”を湛えた存在であることを、はっきりと言える。



ジャン＝ジョエル・バルビエ (pf)
465814 (Accord)



アルド・チッコリーニ (pf)
「セヴラック ピアノ作品集1」
(EMI ミュージック・ジャパン)

1970年、BAM社のために録音されたバルビエの《セルダーニャ》全曲演奏は、後に、アコール／ユニヴァーサル (Accord/Universal) レーベルのCDとして復刻された。これには、同時に録音された《日向で水浴をする女たち》と、1988年の録音だという《ラングドックにて》よりの2曲——〈祭りの日の畑屋敷をさして〉〈春になった墓地のひとすみ〉——も含まれており、大切に吟味した1枚として心から推せるが、いま現在、入手可能か否かは大いに気になるところ（念のためCD番号を記しておけば〈Accord S 465 814-2〉である）。

* * *

アルド・チッコリーニによる、LP3枚を費して《セルダーニャ》《ラングドックにて》《大地の歌》ほか、主なセヴラック作品を網羅したアルバムがフランスで出されたのは、バルビエの来日より、たしか少し後のことだったと思う。当時の東芝レコードが幸いにもこれに反応してくれ、3枚のうちの2枚——《セルダーニャ》中心のものと、《ラングドックにて》中心のもの——を日本盤として発売したのだが、その折、私は解説を任せてもらった。おそらくその文章が、日本のレコード・ファンにほとんど初めて、セヴラックの人と作品について概略なりと知らしめるものになったと思う。チッコリーニは、私見ではこのところ、円熟味が増すにつれてかなり大きく変貌し、個人的・独創的な解釈をためらうことなく打ち出して聴きてを唸らせるピアニストになったが、セヴラックを入れた若い頃には、至って端正かつ“健全な”演奏をする人であった。従って、余分な粉飾のない演奏ぶりは、曲目を素直に味わわせ評価させるためには好都合、とも言えた。ただ、バルビエのような人の“味”と比較するとき、チッコリーニの演奏が、十分に美しくはあれ、“コクのない（あるいは淡い）もの”と感じられたのは否めぬであろう。

何はともあれ、80年代の初め頃、東芝EMIから発売になった、チッコリーニによる2枚の「オール・セヴラック・アルバム」が、この作曲家の日本における知名度を高めると共に、掛替えのないその詩情の世界に目を開かせる役割を果たしたことは疑いない。これらはやがてCDともなって、長きにわたり、心ある人びとから愛されつづけた。いま、私がひそかに希うのは、すでに言ったとおり歴然と芸風をあらため、深めたこんにちのチッコリーニ——2011年現在、86歳——が、セヴラックを再録音してくれることである。

セヴラックのこと、とりわけ《セルダーニャ》については、作品自体について、レコーディングについて、まだ話してみたいことは多い。次号をお待ちくださるなら、幸せである。

(つづく)

リレー連載

セヴラックと私

本宮廉子

出会い

5年ほど前に、フランスの作曲家 H. デュパルク (1848 - 1933) の歌曲ばかりを集めた貴重なコンサートに行った。残された作品は数少ないが、フォーレ、ドビュッシーと並びフランス歌曲に欠かせない作曲家で、学生の頃よりフランス歌曲に魅了されてきた私にとっても大きな存在であった。興味深く演奏を聴き (鎌田直純さんも出演)、感想をいち早く誰かに伝えたい、という思いが募ったのだろう、その晩合唱団のメンバーに送ったメールの追伸に (古典派の作品を演奏する合唱団で、おそらくデュパルクを知る人はいないだろうと思いはがらも)、要件とはまったく関係のないデュパルクの歌曲について書き記していた。

まもなく、当時同じ合唱団に所属していた山根京子さんから「フランス音楽がお好きなのですが、セヴラックという作曲家をご存じですか?」と連絡を頂き、これがセヴラック協会のことを知るきっかけとなった。

恵比寿のエナスタジオで開かれた 2006 年 12 月の例会は、和やかな雰囲気の中、館野先生のセヴラック音楽祭のお話からはじまった。サン＝フェリクス・ロラゲのこと、村祭り気分の音楽祭のことなど、ついこの間の出来事のように実に楽しそうに話された。翌年のセヴラック音楽祭が、フランス・スペイン・日本の 3 つのセヴラック協会が合同で開催することに決まったらしく、先生のワクワクするような気分がこちらにまで伝わってくるようだった。話の内容ばかりでなく、初めて耳にする館野先生の味わい深い語り口とても印象的で、まだ見ぬ南仏の大地にすっかり魅せられた私の頭の中には、一面のひまわり畑がひろがった。

年が明け、セヴラック音楽祭ツアーの話がまとまりつつあるなか、まだ協会の方々とほとんどお話したことがなかった私は、まとまった夏期休暇を取っての海外旅行に踏み出せないでいた。そんな私の背中を押したのは、山根さんの「絶対に楽しい旅行になるからぜひ参加してみてください!!」と 120% の確信 (?) をもった言葉だった。私は当時勤めていた会社を 6 月で退社、7 月 17 日の夜に成田を発ちツールーズへと向かった。

(この頃から演奏活動が増えてきたことも退社を決めた要因だったが、この旅行が決断のきっかけを作ってくれた。そして 2007 年は私にとって節目の年となった。)

セヴラックの歌曲を演奏

音楽祭に参加した夏から 4 年が経ち、6 月のある日、フランス歌曲のサークルでお世話になっているピアニストの先生から「セヴラック歌曲の勉強会をやってみただけけど、本宮さん、企画してくれない?」と連絡を頂いた。このサークルではここ数年フォーレの歌曲演奏会に力を入れてきたが、なかなか演奏される機会の少ないセヴラック歌曲をフランス人の講師

をお招きして歌ってみたいとのこと。取り上げる曲目、演奏者をどうしようかと考えている矢先に、前回のセヴラック協会例会(6/25)があった。懇親会のときに隣にいらした豊永由美さんと多田恭子さん(初対面でした)に声をかけてみたところ、「ぜひ!」とのお返事。勉強会では独唱曲ばかりでなく、重唱にも初めて取り組んでみようと考えていたので、多田さんがアルトのパートを担当してくださったのは心強かった。

猛暑の中、伴奏して頂いた豊永さんのお宅で数回練習した。多田さんは遠方のところ茅ヶ崎から足を運んでくださった。

勉強会当日の9月11日は、これまでで一番多い参加者が集まり、《私の可愛いお人形》の三重唱版を、独唱版に続いて演奏。2曲の違いを聴いてもらった。親しみやすい曲だが、三重唱版のメロディー以外のパートには複雑な動きをする箇所があり、思いのほか音を取りづらい。人前で歌うのは学生の時以来とおっしゃっていた多田さんだが、本当によく練習してくださり、難しいアルトパートをしっかり支えてくれた。その後、参加者全員でこの重唱曲を初見で歌ってみよう!というやや無謀な試みも、おかげさまで大好評に!

フランス人の先生にとって《私の可愛いお人形》は、幼い時に祖母がよく歌ってくれた思い出の曲であったとのこと。普段はあまり感情を表に出さない方が、この時は意外なほどに喜んでくれたことが、なによりだった。

さらに、セヴラックの世界を知って頂くならピアノ曲もぜひ紹介しようと、《ロマンティックなワルツ》の演奏も披露。歌い手が多いサークルということもあり、とても新鮮だったようだ。(館野先生のCD「ひまわりの海」、深尾さんの「ピレネーの太陽」も紹介しました)。

後半は《空は、屋根の向こうに》を私が豊永さんの伴奏で歌った。以前にセヴラック協会例会でも鎌田さんと末吉先生による演奏を聴かせて頂いたことがあるが、この曲の繊細な美しさは格別だ。練習を重ねるごとに、選び抜かれた音のひとつひとつが沁み渡ってくるような感覚があり、豊永さんと毎回感動していた。フォーレやアーンとはまったく違うアプローチで作曲されているのも興味深い。続いて対照的な《仔馬》を別の方が演奏して、それぞれ違った個性のセヴラック作品が楽しめる勉強会となった。

一緒に演奏してくださった豊永さんと多田さんにはあらためて感謝申し上げたい。

演奏の後、主催の先生から「セヴラックの故郷を訪れたときのことを皆さんに少し話してくださいませんか?」との提案があり、ひまわり畑に囲まれた村のこと、ワインの貯蔵庫を会場とした手作り感いっぱいの音楽祭のこと、終演後に裏庭で開かれた和やかなパーティーのことなどをお話した。南仏旅行時の写真を持参したのも役立ち、参加者の多くが興味を示してくれたのがうれしかったのと同時に、4年前の夏がなつかしく思い出された。

これを機にセヴラック歌曲のレパートリーも少しずつ増やしていきたい。

第 16 回例会の報告

鎌田和夫

その日は、いつになく重苦しく鬱陶しい厚い雲が垂れ込めていました。時折、気まぐれに雲間から照射する光りは冷房の熱風を浴びたような不快な暑さを覚え、閉口の極みでした。高温多湿の梅雨の季節とはいえ、あまりに過酷だと眩きながら歩いていたら「なにを軟弱な風を吹かすか、被災地の人々を見よ」という声が聞こえて来たような気がしたのです。この重苦しさの所為ばかりではなく、終わりなき福島第一原発の放射線もれも一因していると思わざるをえませんでした。魚の小骨が喉に引っかかって取れないもどかしさ、というのならまだましだと思えるくらい、やるせない思いが募るばかりです。行方不明者の捜索も遅々として進みません。ひとりの幼子の身元が判明しないまま地元の寺が預かり供養しているという記事が載っていました。いまだ家族と巡り会えていないのです。ひょっとしたら家族全員が津波にさらわれてしまったのかもしれませんが。

現在も原発事故の解明がなされないまま、原発再稼働の動きが当然のように言われはじめました。さらに、途上国へ日本の原発を売り込もうとしている無神経さ。なんていう国でありましょうか。

この 10 月初旬、中米パナマで開催された気候変動枠組み条約の特別作業部会会場で、各国の環境保護団体で構成される「気候行動ネットワーク」が、日本政府に対し『化石賞』を贈りました。福島第一原発事故を起こしながら、地球温暖化対策を理由に原発を輸出しやすい仕組みに形作っていった後ろ向きの発言が受賞の理由です。「国民に途方もない苦難をもたらした技術を途上国に輸出し、見返りに排出枠を得ようとしている。不適切かつ無責任、道徳的に誤っている」と怒りと皮肉いっぱいメッセージが添えられました。いかに日本が危険な状況にあるかということの世界は熟知しているのです。海外からの観光客やアーティストたちのキャンセルが相次ぐことから明らかでありましょう。そんなことに全く頓着しない重症患者が原子力村に棲息しているのかと思うとゾッとします……。今の心境を詩に託しました。

黄泉路
鎌田和夫

死者の心を想い
死者を背負い歩むのは
生者の歩み行く道

悲哀の道の

光りを求め

運命を共に

決して焦ることなく

ゆっくり慌てず

歩み行く道を

さまよい戸惑い

よろけ惑いつつ

探し求めねばならぬ

よしんばそこが

黄泉路であろうとも

例会のはじめはセヴラックの歌劇《風車の心》から、第 1 幕第 4 場。演奏に先駆け末吉保雄先生の解説がありました。葡萄の収穫祭の日、久しぶりに故郷へ戻ったジャックがマリーと再会するところです。すでにマリーは金持ちのピエールと結婚していたことをジャックに打ち明けます。ことのほか美しい田園の夕暮れの場面です、と末吉先生が話された時、サン＝フェリックス・ロラゲを訪れた夕景の情景が思い出されたのでした。見晴らしのいい高台で地元の皆さんからシャンパンで歓迎されたささやかで温かな心の宴のことを。心地よい夕暮れが蘇っていました。……マリーはジャックに対して罪の意識もあり「一緒に田舎から抜け出さないか」というジャックの誘いにマリーの心は揺れます。その二人の見せ場が歌われます。マリーは美貌美声の持ち主であるソプラノの森朱美さん。ジャックは声の艶が増したバリトンの鎌田直純さん。シャンソン風の調べが圧巻でした。喜びの哀しみ、哀しみの喜びに満ちあふれ、別れなければならない別れに辛さ、その二重唱に全身がゾクゾクしたものでした。もちろんピアノは末吉先生。

続いて松本智勇さんの写真による「南仏セルダニュー地方の教会建築と歴史」について。久しぶりの登場です。地道に足で取材を重ねながら古い事象を集め、研究に余念がなく、自然発酵させていく松本さんの着実な姿勢が滲み出て、臨場感が味わえました。ローマ・カトリックの酷い弾圧に抗しながら息絶えたカタリ派の悲劇には常に胸痛み、心に沁みます。厳かな気持ちになりながら、セヴラックが通っていた教会が未だ存在することに安堵するのです。

休憩後はクラリネットの浜中浩一さんと館野先生のピアノによるエスカンデ《ブレイング・チェス》。チェスの対決を音楽にした珍しい曲でした。芸大時代からの友人である浜中さんとの演奏に「青春の頃に戻ったような気分です。世界試演です」と館野先生が悪戯っぽそうな笑顔で解説してくれました。すっかりチェスと遊び興じているような演奏に、心が楽しく弾んでいたのです。僕はルールは知りませんが、息の合った二人の掛け合いを聴いていましたら心浮き立ち、詩が生まれました（「チェスの宴」）。

最後はジュラル・プーレさんのヴァイオリンと深尾由美子さんのピアノで、ドビュッシー《ヴァイオリン・ソナタ》とセヴラック《「ミニョネタ」フィゲラスの思い出》。ドビュッシーのヴァイオリンは静かに語りかけるように風と遊び、風の中をさすらい、いっぱい陽光を浴びた雲の上を歩いているような心地がしました。深尾さんが説明されたように温かな光りの中でヴァイオリンがゆったりと自由気儘にお喋りしている様子が楽しめたのです。南仏の香りが清々しく漂い、爽やかな空気を運んで来てくれましたから、すっかり外の鬱陶しさを忘れさせてくれました。セヴラックのヴァイオリンの音色は哀しみを遊び、喜びを遊び、怒りを溶かし、涙を笑いに変えてしまうような大らかさが伝わって来るのでした。もっと人は自然の摂理を大切に育み抱き、感謝の心を忘れないようにしなければならぬ、そんな風に優しく囁くように心に響きわたって来ました。

この幸せを独り占めにしてはならない。そう想ったら詩が浮かびました（「白い花」）。

チエスの宴

鎌田和夫

まどろみの 空気ただよう 昼下がり 薄暗がりの 部屋の中 市松模様の 盤上 チエスと戯れ 男ども 二つの影の やわらかに くわえ煙草を くゆらせりや ワインをあおる 影のゆれ いつでも来いと 豪語すりや 騎士のお出まし 受けてみよ	フヘェッソと ゲップのような 放屁して 気取ってみても 力なく 悟られまいと 背を伸ばし 紳士気取りに あやしげな 司教の帽子 投げ入れりや 軽く逃げられ 女王の 恐ろしき笑み	アレコレと 手練手管の 駆け引きを 落ち着き払って 黙礼し さわめる技の 紙一重 ごまかし披露 やり遂げて おごそかに 王の相手を してみれば 精魂つきて 腰の抜け ささやかな宴 麗しく	いつか二人は 酔いしれて 市松模様に 胡坐かき 将棋の駒に なりすまし オレが王さま とくと見よ 酒に遊ばれ 盤上に ツワモノどもが 夢の中
---	---	--	---

白い花

鎌田和夫

水底に 沈み逝く花 白い花 微笑み濡れて 咲いていた	咲くよ咲く 白い花 咲き濡れて またたくよ 白い花	暗闇に 沈み逝く花 白い花 星のまたたき 咲いていた	咲きたくて 白い花 咲くよ咲く
--	---------------------------------------	--	-----------------------

NEWS

- 『デオダ・ド・セヴラック——南仏の風、郷愁の音画』
が吉田秀和賞を受賞

日本で初めてになるセヴラックの本格的な評伝

『デオダ・ド・セヴラック——南仏の風、郷愁の音画』
椎名亮輔著（アルテスパブリッシング）

が先月刊行されましたが、

10月13日、音楽、演劇、映画、美術などの分野で優れた評論を発表した人に贈られる第21回吉田秀和賞を受賞しました。



選評は次のとおりです。

「日本ではあまり知られていないが、ドビュッシーやラヴェルとも親交があり、また彼らが作品も高く評価したフランスの作曲家、デオダ・ド・セヴラック（1872～1921）の生涯とその業績を、様々な資料をもとに詳しく綴った日本で初の本格的評伝。南仏の名門の旧家に生まれたセヴラックは、パリで音楽を学ぶが、その後、生涯にわたって愛し続けた南仏に活動拠点を移し、作品を発表し続けた。ドビュッシーが「良い香りがする」と称賛した彼の音楽の秘密とは何か。また、その思想が現代に投げかける意味が、鮮やかに読み解かれている」

セヴラックについて多角的な視点から論じられていて、様々な読み方が楽しめる充実した内容です。この受賞をとおして、セヴラック・ファンがさらに増えるかもしれません。当協会にとってもうれしいニュースです。

なお、受賞者の椎名亮輔さんの伴奏、当協会会員のソプラノの奈良ゆみさんによるセヴラック歌曲リサイタル

「南仏から薫る一陣の風 デオダ・ド・セヴラック——歌曲と古いシャンソン」が10/28（金）19:00 から日仏会館ホールで開催されます。

編集後記

- ◆第16回例会の松本智勇さんのお話をテープ起こしする際に、ブログを拝見しました。建築、美術、音楽、歴史、食べ物にいたるまで、幅広い話題の充実した内容。感嘆しました。セヴラックの話も読み応えがあります。ぜひご覧ください。
<http://stundenbirne.jugem.jp/>
- ◆演奏会情報を会報に掲載ご希望の方は、severac.japon@gmail.com までメールにてお知らせください。

セヴラック通信 第11号 2011 後期 日本セヴラック協会 会報

2011年10月23日発行

発行：日本セヴラック協会

<http://www.geocities.jp/severacjp/index.html>

E-Mail: severac.japon@gmail.com

名誉会長◎カトリーヌ・ブラック・ベレール

顧問◎館野泉、濱田滋郎、末吉保雄、小沼純一

事務局◎伊東美香、亀田正俊、窪田葉子、松田純子

事務局：松田純子◎〒247-0013 横浜市栄区上郷町 262-32-5-204 TEL & FAX: 045-895-2317

連絡先：亀田正俊◎ TEL&FAX: 042-502-7227 / E-Mail: kameyan@jcom.home.ne.jp

印刷・製本：フェデックス・キンコーズ・ジャパン

